

## 悩める帝・黄帝

### Huangdi : The Suffering Emperor

角屋 明彦

KADOYA Akihiko

#### [要約]

黄帝の断片的な伝説をつなぎ合わせると「雄々しき帝」としての黄帝の映像が見えてくる。しかし、やがて伝説が時代の推移とともに広がってゆき、〈天〉という概念に到達すると、所謂、黄老思想に発展してゆく。この黄老思想のなかで創り出された数々の説話は、「悩める帝」としての黄帝の姿を描き出す。伝説から説話へ、「雄々しき帝」から「悩める帝」へ、ポジティブな黄帝からネガティブな黄帝へと、黄帝像は大きな流れをなして変容してゆく。本稿は前漢初期までのその変容の様相を整理し、背景を考察しようとするものである。

#### キーワード：

黄帝、説話、〈天〉、黄老思想

#### [Summary]

Combining the various fragments of the legends of Huangdi (黄帝, the Yellow Emperor) reveals an image of a heroic emperor. However, with the passage of time these legends grew until reaching the concept of 〈Ten〉 (天), developing under the influence of Huang-Lao Ideology (黄老思想). Many episodes presented by this ideology depict an image of an ailing, suffering Emperor Huangdi. From legends to episodes, from the heroic emperor to the suffering emperor, from the positive Huangdi to the negative Huangdi, his image changed significantly over time. This paper scrutinizes the phases of these changes until the early Former Han Dynasty (前漢) and examines the background of these changes.

#### Keywords:

Huangdi, episode, 〈Ten〉, Huang-Lao Ideology

#### はじめに

春秋時代以降、「黄帝」という言葉が古典に登場する。それらによれば、黄帝は太古の昔の英雄であった。混乱した世情を收拾して人心を安寧に導き、道具を創案し、産業を振興し、道路を整備し、制度を策定し、人材を登用し、文化を発揚させ、……新しい国を造つ

ていった。断片的な伝説をつなぎ合せると、黄帝はまさに中国の基礎を創った英雄、雄々しき帝、であった。(1)

黄帝の伝説はまた新たな伝説を生み出し、それぞれの地域や時代、空間的・時間的影響のもとに変容し、あたかもひとつの生き物のように成長したのである。そして、やがて〈天〉という概念も吸収してゆくことになる。すると〈天〉というこの概念が黄帝像を本質的に変えてゆくことになったのである。どちらかと言えば由来不詳で自然発生的な伝説から、人為的で意図的な説話が生み出され、これまでになかった黄帝像が描出されるようになったのである。

## 第一章 〈天〉という概念との結びつき

『莊子』には、

○黄帝 之(=道)を得て、以て雲天に登る。(『莊子』内篇・大宗師)

黄帝は道を得て天に登った、とある。ここに〈道〉とは道理・真理であり、〈天〉とは天空であると同時に天道でもある。つまりは黄帝登天伝説と黄帝順天伝説の結合したものである。そして〈道〉を会得して〈天〉に登ることはひとつの理想であった。黄帝はその理想を実現した人物と看做されている。

しかし、だからといって黄帝の治世が最上のものであったわけではない。太古の世から時が経つにつれて秩序が悪化してきた、と『莊子』は捉え、黄帝をその下降を止めようとした君主として位置付ける。

○徳また下衰し、神農・黄帝に及んで始めて天下を爲<sup>をさ</sup>む。是の故に安なれども順ならず。(『莊子』外篇・繕性)

上記の文章の前には以下のようにある。

○古の人、混芒<sup>こんぼう</sup>の中<sup>うち</sup>に在りて、一世<sup>とも</sup>と與<sup>とも</sup>にして澹漠<sup>たんぱく</sup>を得たり。是の時に當<sup>あ</sup>つてや、陰陽和靜に、鬼神擾れず、四時<sup>よ</sup>節<sup>せつ</sup>を得、萬物傷はれず、羣生<sup>ぐんせい</sup>天<sup>てん</sup>せず、人、知有りと雖も之を用ふる所無し。此れを之れ至<sup>し</sup>一<sup>いつ</sup>と謂<sup>い</sup>ふ。是の時に當<sup>あ</sup>りてや、之を爲<sup>をさ</sup>すこと莫<sup>な</sup>くして常<sup>おのづか</sup>に自ら然<sup>しか</sup>り。(『莊子』外篇・繕性)

大昔の君主は混沌のなかにいて世の民とともに恬淡の道を得ていた。その頃は陰陽が和らぎ、鬼神の乱れもなく、季節のめぐりも順調で、万物はそこなわれず、生き物たちは命半ばに死ぬことがなかった。それ故、人は知恵があっても使うことはなかった。これが至一という一体の境地である。この境地にあつては、すべてが無為かつ自然であった。

○徳の下衰するに逮<sup>およ</sup>び、燧人<sup>すゐじん</sup>・伏戲<sup>ふくぎ</sup>に及びて、始めて天下を治む。是の故に順なれども一ならず。(『莊子』外篇・繕性)

ところが、君主の徳が衰えてゆき、燧人氏・伏戲氏の世になって、はじめて無為ではなく人為で天下を治めるようになったが、人々は自然に順ってはいたが、至一ではなくなった。これに前述の部分が続く。再度引用する。

○徳また下衰し、神農・黄帝に及んで始めて天下を爲<sup>をさ</sup>む。是の故に安なれども順ならず。(『莊子』外篇・繕性)

徳はさらに衰え、神農氏・黄帝の世になると、ますます人為で天下を治めるようになって、人々は安らかに暮らしはしたが、自然に順うものではなくなった。この記述の根底に

は儒家思想が世俗政治世界の指導原理として浸透してゆくことを社会秩序の下降であるとして批判的に評価しようとの意図がある。極端に言えば、黄帝の政治でさえ正しいとは言えない。むしろ秩序の崩壊である、と『莊子』は言うのである。

○昔者、黄帝 始めて仁義を以て人の心を擾せり。(『莊子』外篇・在宥)

黄帝は仁義という理念で世を治め、結果、人々の心を乱してしまった。『莊子』においては黄帝を儒家思想の系列中に位置づけて非難するこうした章句があるのである。

しかし、その一方で、『莊子』は黄帝がその理想を実現しようと努力し、やがて〈道〉を会得して〈天〉に登るまでになる人間的苦悩をした帝でもあると解釈して、さまざまな説話を用いてその人間性を描き出そうとする。

かくて、黄帝を「雄々しい帝」というイメージで描写する黄帝伝説の系譜と異なり、〈天〉の摂理を得ようと苦悶を続けた「悩める帝」というイメージの系譜が存在することになる。

## 第二章 黄帝説話に見る黄帝

### 第一節 玄珠紛失騒説話

『莊子』に以下のような短い説話がある。

○黄帝 赤水の北に遊び、崑崙の丘に登り、南望して還歸するに、其の玄珠を遺へり。知をして之を索めしむるも得ず。離朱をして之を索めしむるも得ず。喫詬をして索めしむるも得ざるなり。乃ち象罔をせしむ。象罔 之を得たり。黄帝曰く、異なるかな象罔。乃ち以て之を得べきかと。(『莊子』外篇・天地)

黄帝は南の果てに大海に注ぐ赤水の北に旅をした。名高い仙山・崑崙山にも登った。さらに南を眺め見た。黄帝の政務は精勤なものであった。〈道〉を求めて沈思思索する心の旅を描いているのであろう。そうした哲理探究から現実世界へと意識が戻った。〈道〉を求めつつも、政道も正さねばならない。ところが無為から有為に戻ると「玄珠」を失ってしまったことに気がついた。玄妙な真理は世俗には見つけ難いのか。黄帝は〈道〉を求めるひとりの人間であるとともに、国を治める君主でもあった。前者でいられる時は深遠な心境にもなれようが、後者である時は鬱積する現実の諸問題を処理しようと没頭するなかにもどうしても世俗の塵芥に心がまみれてしまう。それで「玄珠」をなくしたというのであろうか。黄帝は「玄珠」を再び得ようとして「知」という名の者に探させる。しかし知識を駆使しても〈道〉は見つからない。次に「離朱」なる者が探すが、優れた視力をもっていたとされるこの者が世俗世界にいかにも眼を凝らしても〈道〉は見えもしない。「喫詬」とは巧みな口舌の能弁を意味する。言葉を駆使してもやはり〈道〉は得られない。そこで「象罔」の出番となった。もやもやとして象が罔いという名のこの人物は見事に「玄珠」を探し当てた。黄帝は無心が〈道〉に至る道であると得心する。(2) 黄帝は〈道〉を悟りきって安定した心理に常にいることができているのではなく、世俗のなかであって、ともすれば〈道〉を見失いがちであった。そういう含意の説話と考えられる。

## 第二節 広成子対話説話

これも『莊子』にある説話である。

○黄帝立ちて天子たること十九年、令 天下に行なはる。廣成子の空同の上<sup>くわうせいし くうどう</sup>に在りと聞く。故に往きて之を見て曰く、我 吾子の至道に達するを聞く。敢へて至道の精を問はん。吾 天地の精を取りて、以て五穀を佐け、以て人民を養はんと欲す。吾 又 陰陽を官して、以て羣生を遂げしめんと欲す。之を爲す奈何と。廣成子曰く、而<sup>なんぢ</sup>の問はんと欲する所の者は、物の質なり。而の官せんと欲する所の者は、物の殘なり。而 天下を治めしより、雲氣は族を待たずして雨ふり、草木は黄ばむを待たずして落ち、日月の光は益々以て荒れぬ。而 佞人の心<sup>ねいじん せんせん</sup> 翦翦たる者、又奚んぞ以て至道を語るに足らんと。

黄帝退きて天下を捐<sup>す</sup>て、特室を築き、白茅を席<sup>し</sup>き、閑居すること三月、復た往きて之を邀<sup>むか</sup>ふ。廣成子 首を南にして臥す。黄帝 下風に順ひ、膝行して進み、載拜稽首して問ひて曰く、吾子の至道に達するを聞く。敢へて問ふ、身を治むるに奈何にせば<sup>すなは</sup>、而ち以て長久なるべきと。廣成子 蹙然<sup>けつぜん</sup>と起ちて曰く、善きかな問ひや。來たれ。吾 女に至道を語げん。至道の精は窈窈冥冥<sup>えうえうめいめい</sup>たり。至道の極は昏昏默默<sup>こんこんもくもく</sup>たり。視る無く聴く、神を抱きて以て靜ならば、形 將に自ら正しからんとす。必ず靜必ず清にして、女の形を勞する無く、女の精を搖<sup>えう</sup>する無くんば、乃ち以て長生すべし。目に見る所無く、耳に聞く所無く、心に知る所無くんば、女が神 將に形を守らんとす。形乃ち長生せん。女の内を慎み、女の外を閉ぢよ。知多ければ敗を爲す。我 女の爲に大明の上に遂<sup>い</sup>で、彼の至陽<sup>みなもと</sup>の原に至らん。女の爲に窈冥の門に入り、彼の至陰の原に至らん。天地に官有り。陰陽に藏有り。慎みて女の身を守らば、物 將に自ら壯<sup>さか</sup>んならんとす。我 其の一を守りて其の和に處<sup>を</sup>る。故に我が身を脩むること千二百歳なるも、吾が形未だ嘗て衰へざるなりと。

黄帝 再拜稽首して曰く、廣成子を之れ天と謂はんと。廣成子曰く、來たれ。余 女に語げん。彼の其の物<sup>きわまり</sup>は窮無きに、人は皆以て終ると爲し、彼の其の物<sup>そく</sup>は測無きに、人は皆以て極ると爲す。吾が道を失ひし者は、上は光を見、下は土と爲る。今、夫の百昌は皆土より生じて土に反る。故に余 將に女を去り、無窮の門に入りて、以て無極の野に遊ばんとす。吾 日月と光<sup>おな</sup>を參<sup>かへ</sup>じくし、吾 天地と常<sup>じょう</sup>を爲す。我に當るも繆<sup>こん</sup>たるかな。人は其れ盡く死するも、我は獨り存せんかなと。〔『莊子』外篇・在宥〕

黄帝は君主として十九年の歳月を過ごした。それは黄帝徳政伝説にあるようなものであつたろう。黄帝の威令は天下に行われたが、広成子が空同山にいと聞いて〈道〉を求めて訪ねて行った。山の名の「空同」は空洞、つまりは虚無という意味に通ずる。広成子とは老子のこととも言われているがそれは不詳である。黄帝はこの広成子に会って〈道〉に至る道を問うた。それは天地の精を取って五穀の生長を助け、民を養い、陰陽を整えて、人々が暮らしてゆけるようにするためです、と。しかし、広成子は言う。おまえはものごとの本質を知りたいと望みながら、問題にしていることはものごとの残滓である。おまえが天下を治めるようになってから、この世の秩序は壊れてしまった。そんな浅はかなおまえに教えるものはない。黄帝は問いかけのありかたそのものを広成子に罵られてしまった。

都に帰った黄帝はそれから三ヶ月、閑居して心を改め、再び空同山に広成子を訪ねる。

そして今度は、永遠の生命を得るための身の治めかたを問うた。何かの世俗的な目的のためにもごとの本質を知ろうとするのではなく、本質を知って自分の存在を深めようとしたのである。そこで広成子は本質を黄帝に語る。ものごとの本質そのものが存在であるからである。黄帝は〈天〉と一体に存在する広成子を見て〈天〉を知った。

### 第三節 大隗探訪行説話

もう一つ『莊子』から引用する。

○黄帝 將に大隗を具茨の山に見んとす。方明 御たり。昌寓 驂乗し、張若・譚朋 前馬し、昆闓・滑稽 後車たり。襄城の野に至る。七聖 皆迷ひ、途を問ふ所無し。適々牧馬の童子に遇ひ、塗を焉に問ひて曰く、若 具茨の山を知るかと。曰く、然りと。若 大隗の存する所を知るかと。曰く、然りと。黄帝曰く、異なるかな小童、徒に具茨の山を知るのみに非ず、又 大隗の存する所を知れり。請ふ、天下を爲むることを問はんと。

小童曰く、夫れ天下を爲むる者は、亦た此くの若きのみ。又奚をか事とせん。予 少くして自ら六合の内に遊ぶ。予 適々督病有り。長者有りて予に教えて曰く、若 日の車に乗りて襄城の野に遊べと。今、予が病 少しく瘥ゆ。予 又 且に復た六合の外に遊ばんとす。夫れ天の下を爲むるも亦た此くの若きのみ。予 又 奚をか事とせんと。黄帝曰く、夫れ天下を爲むる者は、則ち誠に吾子の事に非ず。然りと雖も、請ふ、天下を爲むることを問はんと。小童 辭す。黄帝 又 問ふ。小童曰く、夫れ天の下を爲むる者は、亦た奚ぞ以て馬を牧する者に異ならんや。亦た其の馬を害する者を去るのみと。黄帝 再拜稽首し、天の師と稱して退く。（『莊子』雜篇・徐無鬼）

この話でも黄帝は求めるところがあって旅をする。現状に満足せず、深い真理が得たい。帝位にありながら心のなかには悩み悶える苦しみがあった。そして大道を得て隗然と聳え立つ険しい山のような「大隗」という名の人物に会おうとして車上の人となる。御者を務めるは、四方に明るい知恵をもつ「方明」、添え乗りには宇内を昌えさせる「昌寓」、盛んに枝張る若い木にも似た「張若」と羽をはばたかせ天翔る鵬のような「譚朋」の二名が先駆け、後詰めが昏黒の深きところより滾滾と湧く英知をもつ「昆闓」と頭のめぐり良く稽えの円滑に及ぶ「滑稽」の二名であった。人智の限りを並べた陣容である。それが鬱蒼と草木の生い茂る襄城の原野に道を失ってしまった。そして、名も無き馬飼いの少年に出会う。黄帝の問いに対し、少年は具茨の山に至り大隗に会う道を知っていると言う。黄帝はこの少年こそが〈道〉を体得した人物であると悟り、天下・この国の治め方を問う。

少年は言う。幼い時、私は天地自然のなかで遊び暮らしていました。しかし、やがて目が曇り眩む病に罹りましたが、ある老人から〈天〉の動きとともに遊ぶように暮らせと教えられ、そのようにすると少し良くなりました。この〈天〉の下を治めるのもそれと同じで、治めようとしなないのが一番です。黄帝はさらに問う。あなたは天下を治めることとは無縁である。しかし、天下・この国を治めたい私はいったいどうすればよいのか。少年は口をつぐんだ。それでもと迫る黄帝に少年は言う。それは私のように馬を飼う者と違いがありますでしょうか。馬の天性を損なうものを取り除くだけです。黄帝は少年を〈天〉を知る師として再拜稽首するとその前から引き退がった。

#### 第四節 夢中華胥游説話

『列子』には黄帝の名称をそのまま篇名にする篇が存在する。その最初の部分が黄帝に関する説話である。

○黄帝 即位して十有五年、天下の己を戴くを喜び、正命を養ひ、耳目を娛しましめ、鼻口に供したるに、<sup>せうぜん</sup> 燦然として肌色<sup>きしよく</sup> 肝<sup>かん</sup> 黝、昏然として五情爽惑せり。又の十有五年、天下の治まらざるを憂へ、聰明を竭くし、智力を進くし、百姓を營めたるに、燦然として肌色肝黝、昏然として五情爽惑せり。黄帝 乃ち喟然として讚じて曰く、朕の過ち淫し。一己を養ふに其の患ひ此くのごとく、萬物を治むるに其の患ひ此くのごとし。是に於て萬機を放ち、宮寢を舎き、直侍を去り、鐘懸を徹し、厨膳を減じ、退きて大庭の館に閑居し、心を齋め形を服へ、三月、政事を親しくせず。晝寝て夢み、<sup>くわしよ</sup> 華胥氏の國に遊ぶ。華胥氏の國は、<sup>えん</sup> 兪州の西、台州の北に在り。齊國を斯ること幾千萬里なるを知らず。蓋し舟車足力の及ぶ所に非ず。神游のみ。其の國、師長無く、自然のみ。其の民、嗜欲無く、自然のみ。生を樂しむを知らず。死を惡むを知らず。故に夭殤無し。己を親しむを知らず。物を疎んずるを知らず。故に愛憎無し。背逆を知らず。向順を知らず。故に利害無し。都て愛惜する所無く、都て畏忌する所無し。水に入るに溺れず、火に入るも熱せず。斫撻するに傷痛無く、指擗するも瘡癢無し。空に乗ずること實を履むがごとく、虚に寝すること牀に處るがごとし。雲霧も其の視を礙げず。雷霆も其の聽を亂さず。美惡も其の心を滑さず。山谷も其の歩を躓かしめず。神行のみ。

黄帝 既にして寤め、怡然として自得す。天老・力牧・太山稽を召し、之に告げて曰く、朕 閑居すること三月、心を齋め形を服へ、以て身を養ひ物を治むるの道有らんことを思ふに、其の術を獲ず。疲れて睡り、夢みる所 此くのごとし。今 至道の、情を以て求むべからざるを知れり。朕 之を知れり。朕 之を得たり。而れども以て若に告ぐる能はずと。又二十有八年、天下大いに治まり、幾んど華胥氏の國のごとし。  
(『列子』 黄帝)

この説話の黄帝は長い統治のうちに政務が空回りし始め、自身の顔色がうす黒くなり、五感も乱れ、疲労困憊してしまう。あれほどの雄々しき帝も、ここでは悩める帝になってしまっている。黄帝も病むのである。そこで政務から離れること三ヶ月。昼寝の夢に、遙か彼方の華胥氏の國に遊ぶ。その國は高い身分の者がいない。民は自然に過ごしている。生の享樂も死への恐れもないから早死にという考えもない。自己愛も他への疎外心もないから愛憎というものもない。裏切りも愛着もないから利害関係がない。水に溺れることもなく、火に火傷もなく、何をされても痛くも痒くもない。ごく当たり前に空中を歩行し、虚空を寝台代わりに横にもなれる。霧や雲がかかっても遠くまで見え、雷が轟いても耳が聞こえる。美醜に心を乱すこともない。山谷も躓かずに歩ける。まるで神の振る舞いである。この夢から覚めた黄帝は頓悟する。そして重臣たちを呼んでそれを語って聞かせるが、内容は曰く言い難い。しかし、悟りは悟りである。その後、天下は華胥氏の國のように大いに治まった。概ねそのような話である。

伝説は自然発生的であるが、それに比べて説話はその作り手の意図が強い。さまざまな黄帝伝説が重なり合って「雄々しい帝」として黄帝のイメージが形成されてきたのであ

だが、上に引用した『莊子』や『列子』が描くところの黄帝はそれとは明らかに色合いが異なる。そこには〈道〉を求め、〈天〉に至らんとして悶え苦しみ、ある時は病的になってしまう、そうした「悩める帝」が描かれている。「雄々しい帝」が黄帝のポジティブな側面であるのに対し、「悩める帝」は黄帝のネガティブな側面である。では、何故に後者が付加されたのであろうか。次章ではその背景を考察する。

### 第三章 黄老思想のなかで

黄帝伝説の描く黄帝は「雄々しき帝」であった。黄帝説話のそれは「悩める帝」であった。黄帝の健全な側面と病的な側面の二面性のうちの後者がなぜ浮き彫りになってきたのか。それには政治的な流れを見なければならぬ。

その昔、周に仕えた太公望・呂尚が山東の臨淄に封じられ、齊という国を建てた。

○太公望呂尚は東海の上(ほとり)の人なり。其の先祖 嘗て四嶽と爲り、禹を佐けて水土を平らげ、甚だ功有り。虞・夏の際、呂に封ぜられ、……姓は姜氏なり。(『史記』齊太公世家)

とあるように、姓は姜、氏が呂を名乗るこの国は春秋時代、前七世紀には宰相・管仲(?～前645)が手腕を振り、国勢が伸長し、君主・桓公(在位：前685～前643)は春秋五覇の一人となった。続く前六世紀後半には宰相・晏嬰(?～前500)が靈公(在位：前582～前554)・莊公(在位：前554～前548)・景公(在位：前548～前490)の三代に仕え、節儉力行・尽忠極諫を重ねて臣仕し、いっそう国力が増した。しかしその後、内乱により家臣・田和(のち初代・太公)が前386年に政権を掌握し、国君となった。国号は同じ齊であるが、区別してそれ以前を姜姓齊、以降を田姓齊と呼んでいる。そして田姓齊はやがて戦国七雄のひとつとして成長してゆく。その第四代・威王(在位：前356～前319)が銅器に刻ませた銘文に次のようにある。

○皇考の昭統を揚げ、高くは黄帝を祖とし、邇くは桓・文を嗣ぎ、諸侯を朝問せしめ、その徳に合へ揚げたり。(『两周金文辭大系』)<sup>(3)</sup>

とある。威王は黄帝を始祖と考え、五覇として名高い姜姓齊の桓公や晋の文公の覇業を受け継いでいると主張している。ところで姜姓齊の淵源は、

○黄帝は姫水を以て成り、炎帝は姜水を以て成り、成りて徳を異にす。故に黄帝は姫と爲り、炎帝は姜と爲り、二帝師を以て相ひ擠すは、徳を異にするが故なり。(『國語』晉語)

炎帝は姜水という河のほとりで成人したので姜姓となったと記されている。また、

○炎帝 火師と爲りて、姜姓は其の後なり。(『春秋左氏傳』哀公九年)

とあって、炎帝が火を祭る師長となり、その後裔が姜姓であると書かかれている。いずれにせよ姜姓齊の祖先は炎帝に邇ることができる。この炎帝と戦って勝ったのが黄帝であった。黄帝鎮世伝説に、

○熊・羆・貔・貅・貙・虎に教へ、以て炎帝と阪泉の野に戦ふ。三たび戦ひて、然る後、其の志を得。(『史記』五帝本紀)

○炎帝は火災を爲す。故に黄帝、之を擒にす。(『淮南子』兵略訓)

などとあった。田姓齊は姜姓齊に対し、黄帝が炎帝を降したという伝説を根拠として優位

に立とうとした。そう解釈することもできる。(4)

前四世紀末になると齊の都・臨淄の稷門近くに諸子百家の人士を集める施設が建てられた。世に言う「稷下学宮」である。この学舎では集う人々が自由に学び、自由に教えることが許されたと言われている。そして百花斉放・百家争鳴のなかで黄帝伝説は老子伝説と融合し、〈黄老〉という考え方が生まれ、(5) 〈天〉にまで登った帝は〈道〉に則って論じたり、家臣に語りかけるようになっていった。これが「黄老思想」である。『漢書』芸文志にある「黄帝書」はその典型と考えられるが、そこに並ばなかった夥しい数の「黄帝書」が影に存在していることは想像に難くない。

戦国末期には各国の競合が激化し、それぞれ国勢維持が困難になるなかで、黄帝はある時には政治について、兵法について、天文について、またある時には医術について、〈天〉に至る〈道〉を語る必要がいやましに増していったのである。極言をすれば、黄帝の〈天〉と老子の〈道〉が合流して黄老思想を生んだのであるが、馬王堆漢墓から『老子』の写本が二種、そして『黄帝四書』とおぼしき『経法』『十六経』『称』『道原』の四篇が同時に出土したことも黄帝と老子を併称した「黄老思想」の盛況を裏付けるものとして頷ける。こうした「黄老思想」は秦による統一とその滅亡、そして漢の成立という歴史の流れのなかにも命脈を保ち、殊に漢初にはこれを愛好し、自ら実践する政治家も多くいた。例えば、高祖の重臣であった張良は晩年に政界から退くにあたり、こう言った。

○帝者の師と爲り、萬戸に封ぜられ、列侯に位す。此れ布衣の極みにして、良に於て足れり。願はくは人間の事を棄て、赤松子に従ひて遊ばんと欲するのみ。(『史記』留侯世家)

地位も名誉も遂げ、自分は満足である。今の願いは世俗世間から離れて、いにしへの仙人・赤松子に倣って暮らすことのみである。そう言って張良は辟穀や導引に努めようとした。また、第二代・恵帝の時、齊の丞相であった曹参は、

○膠西に蓋公有りて善く黄老の言を治むと聞き、人をして幣を厚くして之を請はしむ。既に蓋公を見る。蓋公、爲に言ふ。治道は清静を貴ぶ。而して民自ら定まると。此の類を推して具に之を言ふ。参 是に於て正堂を避け、蓋公を焉に舍す。其の治要、黄老の術を用ふ。(『史記』曹相國世家)

曹参は黄老の学を修めた蓋公を招き、蓋公から学んだことを政事に用いた。第五代・文帝の丞相であった陳平も若い頃から黄老の学を好んでいた。

○陳丞相平は、少き時、本 黄帝・老子の術を好む。(『史記』陳丞相世家)

また、文帝自身も、

○孝文 道家の學を好む。(『史記』禮書)

そして、文帝の後・竇后に至っては熱烈な黄老思想の愛好家であった。

○竇太后、黄帝・老子の言を好む。帝及び太子・諸竇も黄帝・老子を讀み、其の術を尊ばざるを得ず。(『史記』外戚世家)

晩年に盲目となった太后は黄帝や老子の説く〈天〉に救いの光明を求め、誰かに読ませて傾聴したのかもしれない。その愛好のあまり、子である景帝や太子、竇氏一族にも黄帝・老子の書を読ませ、学ばせたとある。こうして漢朝初期、黄老思想は宮廷での流行にも支えられて盛況であった。(6) 〈天〉を悟った偉大な黄帝は、変転する厳しい現実のさまざまな領域の多様な問題に〈道〉を実現しようとして自身が悩み、人と論じ、人に語りかけるよ



うになっていったのである。ここに〈天〉の摂理を現実の世に求め苦悶する「悩める帝」黄帝が我々の眼に映ることとなる。

## おわりに

春秋・戦国の時代から漢初までに黄帝は二つの側面を持つようになった。さまざまな黄帝伝説が集まって描き出す「雄々しい帝」という側面。もう一つは「悩める帝」。究極の目的である〈天〉に至らんとして現世で苦しみ悶える姿。それは黄老思想のなかでいくつかの黄帝説話が描き出す側面であった。

「雄々しい帝」が自ら言葉を発することは稀であった。その数少ない具体例を古いもののなかから挙げると、

○嫫母 黄帝に執<sup>えら</sup>ばる。黄帝曰く、女に徳を厲<sup>なんぢ</sup>せば忘れず、女に正しきを與ふれば衰へず。悪しと雖も奚ぞ傷まんと。(『呂氏春秋』孝行覽)

ここでは直接に嫫母に語りかけている。そして、

○黄帝曰く、芒芒昧昧として天の威<sup>よ</sup>に因り、元と氣を同じくすと。(『呂氏春秋』有始覽)

○黄帝曰く、四時は之れ正せず、五穀を正すのみ。(『呂氏春秋』土容論)

ここでは語りかける対象は明記されていない。これらは期せずしてすべて『呂氏春秋』である。これだけのことから『呂氏春秋』を境にそれ以前の黄帝は語らず、それ以降に語るようになった、と結論付けるのは性急であり、未だ土中にある金石・竹簡・帛書の類が日の目を見て再び語り出すのを待つしかないが、黄帝が語る場面の描写は極めて少ないということは言えよう。「雄々しき帝」は語らずとも雄々しかったのである。そして黄帝が積極的に語るようになったのは黄老思想のなかである。黄帝自身が悩み、誰かと論じ、誰かに語りかける。対話問答形式は戦国諸子百家が活用した説得の技法でもあった。その影響を濃厚に受けつつ黄老思想が進展し、そこで「悩める帝」のイメージが強くなっていったのである。

しかし、である。しかし、「悩める帝」はきわめて多くを語り始めた。饒舌とも言えるその典型のひとつが医療の領域である。黄老思想が発展するこの時期に、所謂『黄帝内経』の構成原型となる論文群が作成され、それらは淘汰され補足されて『漢書』芸文志に言う『黄帝内経』『外経』などとなっていったのであろう。それらの「黄帝書」のほとんどが現存していないので内容がつかみ難いが、その延長上にある現『黄帝内経』の素問・靈樞諸篇のうちのかなりが黄帝と岐伯・伯高・少師・少俞・雷公といった医師たちとの対話形式で書かれている。<sup>(7)</sup> 対話形式をとることが論説形式より臨場感を伴い、読み手に理解しやすいからということが大きい理由であろうが、考えようによっては黄帝の悩みが大きいからとも見ることができよう。では黄帝は何故にそれほど悩まねばならなかったのか。それは〈天〉をめざし〈道〉を辿ろうとしたからであろう。〈天〉とは理想である。理想を追究すればするほど、理想と現実の隙間から新たな問題が生じてくる。喩えれば〈天〉は到達不可能な極大値であって、到達可能な最大値ではない。現実には存在しない架空の値(あたい)である。もちろん、現実化できない理想に向かって限りない努力をしてゆくのが人間の人間である所以である。とはいえ、どこまで積み上げても、いつまで近づこうとしても、決して到達できない。そこに時として焦燥や悲観や諦念が生まれる。

ポジティブな「雄々しき帝」であった黄帝のイメージにネガティブな「悩める帝」の色彩が加わってゆく戦国末から前漢初期にかけてのこの時期が、原『黄帝内経』などの医療古典が執筆・編集されてゆく時期に重なると思われるが、政務を積み上げて世俗世間を「治める」黄帝は同時にまた身心の保全確保と障碍解決を継続して「治す」こともしなければならなかった。〈天〉という理想を追究し、〈天〉に向かって限りなく積み上げていこうとすれするほど、その無限の積み上げと〈天〉との隙間からまた新たな悩みが生じてくる。それが黄帝の悩み、即ち〈病〉の正体である。黄帝が〈天〉との結びつきをもったとき、既にして黄帝の〈病〉はそこに胚胎していたのである。(8)

## 注

- (1) これについては、拙稿、「雄々しき帝・黄帝」、本誌、で触れた。本稿はその後編に相当し、両者は陰陽一体をなす。
- (2) この話は『淮南子』人間訓にも記載されている。但し、人物名が「離朱」「捷翫」「忽悦」である。「捷翫」とは鋭いほどの機転、「忽悦」はぼんやりと物忘れするというような意味であろうか。『荘子』からこの『淮南子』に至る伝播経路が不明であり、用語に相違があるが、根本的な主張内容に変わりはない。
- (3) 郭沫若、〈两周金文辞大系下編〉、《郭沫若全集》、考古編第8巻、科学出版社、2002年10月、頁464～466。尚、図が〈两周金文辞大系録編〉、《郭沫若全集》、考古編第7巻、科学出版社、2002年10月、頁583にある。
- (4) 郭沫若が上記(3)の史料などに依拠してこのことを指摘している。郭沫若、〈稷下黄老派的批判〉、《十批判書》、(民国学术经典文库)、东方出版社、1996年3月、頁156～157。併せて、森安太郎、「黄帝伝説」(同、『黄帝伝説：古代中国神話の研究』、京都大学人文学会、1970年7月 所収、153ページ)も参照されたい。
- (5) 浅野裕一、「黄帝への仮託」、(同、『黄老道の成立と展開』、創文社、1992年11月所収)、及び、池田知久、「黄老」から「老荘」を経て「道家」へ、(同、『老荘思想』、放送大学教育振興会、1996年3月所収)を参照されたい。
- (6) 漢初の宮廷にいた黄老思想愛好家の王族・貴族が消え、儒学を支持する新興官僚による政治体制が整備されてゆくにつれて、黄老思想は変質して、やがて養生術の領域にその中心が移る。その経緯は、既に内山俊彦、「漢初黄老思想の考察(二)」、『山口大学文学会誌』、14-1、1963年 が論じている。
- (7) 現行の『黄帝内経』素問は唐・王冰編の次註本をもとに北宋・林億等が校訂した宋本を明・顧從徳が模刊した顧本である。その八十一篇のうち二篇は篇名のみで散佚し、王冰が付加したとされる運氣七篇を除けば、七十二篇構成である。そのうち「黄帝－岐伯」対話が五十三篇、「黄帝－雷公」対話が七篇、残りは対話形式ではない。また『黄帝内経』靈枢は伝本系路が不確かであるが、現在の八十一篇のうち「黄帝－岐伯」対話が五十二篇、「黄帝－伯高」対話が九篇、「黄帝－少師」対話が四篇、「黄帝－少俞」対話が四篇、「黄帝－雷公」対話が四篇、残りは対話形式ではない。
- (8) 医療の領域では黄帝派が主流となってゆく。しかし、『史記』の扁鵲倉公列伝は、扁鵲という名の医師が存在したことを伝えている。扁鵲は〈天〉という概念を用いて医療を説明しない。扁鵲には〈病〉の全体が見える。診察と治療を全体から始めて部分に至る。彼自身はそ

の言葉を使っていないが、敢えて言えばそれは〈全〉の医療であった。これに対し主流派の黄帝派は〈天〉の医療であった。実際には到達できない極限として〈天〉を設定し、それに向けて登ってゆこうとする。理想の秩序、〈病〉の克服を求めて、診察と治療を積み上げる。部分から全体に至ろうとする。扁鵲の〈全〉の医療を黄帝派の〈天〉の医療に対置するものとして両者比較しながら見ると、黄帝の姿をより鮮明に捉えることができる。直接的にこのことを扱ったものとして、拙稿、「<sup>かく</sup>號太子蘇生説話：〈癒〉のベクトル」、『経絡治療』、203、2015年11月があり、間接的に扱ったものとして、拙稿、「扁鵲の〈治療世界〉：號太子蘇生説話」、『尚美学園大学総合政策研究紀要』、24、2014年3月がある。